

二〇一八年度千葉県での『広辞苑』関連講演2件
―二〇一九年七月関西言語学会講演資料も添えて―

Two Lectures on Koujien in Chiba Prefecture for 2018 Fiscal Year:
With Kansai Linguistic Society Lecture Handout in July of 2019

菅野 憲司
KANNO Kenji

要旨 『広辞苑はなぜ生まれたか 新村出の生きた奇跡』の著者である新村恭氏による二〇一八年度での千葉県での二講演及び二〇一九年度関西言語学会での講演時の講演資料の紹介を行う。

二〇一八年度に、『広辞苑』編者新村出博士の御令孫、『広辞苑』なぜ生まれたか 新村出の生きた奇跡』の著者である新村恭氏が、十一月一日千葉大学文学部と十一月二日千葉県立東部図書館で、講演された。それぞれの、配布資料が、続いて、掲載されている。

これら2件の配布資料を読み比べて、会場が大学と図書館ということを反映して、前者は言語学という学問に焦点があたり、後者は佐原という地元に焦点が当たっていて、大筋類にして詳細別である。

前者のご協力に、後者の講演前後を含むご教示に、新村恭氏にお礼申し上げ、前者にもご参加、後者でお世話頂いた千葉県立東部図書館の伊藤健司氏はじめ関係職員の方々に、感謝いたします。

尚、最後に、二〇一九年七月関西言語学会講演資料も添えて、本稿の史料価値を高めた。

言語学者新村出の生い立ちと学問

千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座言語学講演会

二〇一八年十一月一日 新村恭

序

・新村出——明治九（一八七六）年一〇月四日生まれ、父・関口隆吉の次男、母・静子。関口出として生を享ける。新村家の養子となり、昭和四二（一九六七）年八月一七日歿。

関口隆吉は、幕臣で江戸城の警備係、開城に際しては勝海舟の配下で徳川慶喜を護る精鋭隊の一員。徳川家とともに現静岡県菊川市へ移住、家臣団の生活のため茶畑の開墾を提唱。のち、明治政府のもとで地方官になり、山形権令から山口県令になる。

・出は、満四歳のとき、山口県立師範学校附属小学校に入る（プレ教育体験）。

小学校年代

・明治政府にとって学制確立は大事業。最初は建物ない、教師いない、民衆に就学義務の意識ない。税制確立も大きな事業で、その負担とも重なって、建てられた学校は襲撃、焼き討ちの対象にもなった。

・明治一四（一八八一）年、関口隆吉は元老院の議員になり東京の向島に移住。出は低学年年代は複数の知人宅に移りながら寺子屋風のところで手習いをうけた。

・明治一七（一八八四）年春から、数え年で九歳〜一二歳の間、千葉県佐原の旧寺跡（現在、諏訪神社麓の無人の小寺、常照寺）の漢

学塾に親元離れて住み込んで学ぶ。

・テキストは、『論語』『春秋左氏伝』などの四書五経。音読中心。

諏訪の岡のふもとの鄙の寺子屋にただ漢籍の物学びせし（新村

重山）

・小学校は卒業していない。

静岡県尋常中学校時代

・明治一九（一八八六）年四月、中学校令がだされる。中学校は、尋常中学校（各府県一校）と高等中学校（文部省管轄、全国に五校）にわかれていた。

・明治二〇年、静岡県知事になっていた父・関口隆吉のもと静岡県尋常中学に入学。

・一転英語が重きをなすカリキュラム。尋常中学は卒業後、実業につくのを前提としており、理数の時間も多かった。重要学科は「英漢数」と口にされていた。国文学は教わっておらず、歴史の課目もなかった。出も当時漠然と、造船工学とか電気工学の道を考えていた。在学中、憲法発布、帝国議会開会など重要な出来事があつたが、教育のなかで触れらることはなかった。

・明治二二（一八八九）年五月、父・関口隆吉、東海道線の列車事故の怪我がもとで死去。同年一二月に、静岡に蟄居していた、関口の旧主でもある徳川慶喜の側近、新村猛雄の養子となり、慶喜邸の隣に住む。慶喜邸で『万葉集』や『古今集』などの講義を陪聴することもあり、慶喜の子どもたちと『古今集』のカルタをとる等して遊んだ。

・明治二五（一八九二）年三月、静岡県尋常中学卒業。同五月から

上京し、著名な漢学者の塩谷青山のもとに起居し、塾で学ぶ。同じ中学でも尋常は四月始まり、高等は九月始まりだった。

一高時代

・明治二五年九月、第一高等中学校の予科に入学。当時、予科三年、本科二年だった。

・初めて国文学の講義を受ける。資料からは『徒然草』『土佐日記』がテキストに用いられていたことが分かる。新村出は落合直文から教えをうけた。回想では、『土佐日記』『枕草子』『増鏡』があげられている。工学系への希望消える。

・文学青年となり、多くの本を読む。和歌、俳句の作品集も愛読した。シェークスピアも読んだ。ゲーテを愛好し、ドイツ語をよく学んだ。本科は、第一外国語は英語、第二は独か仏だったが、第二外国語のほうがコマ数が多かった。

・明治二七年六月、高等学校令公布、九月より実施。高等中学校は高等学校となり、専門性が明記され、帝国大学予科の性格が強められた。大きな転換である。

法文・工理農・医の三部にわかれて、医は四年、他は三年の新たなカリキュラムが設定された。第一、第二外国語は各部によって（法文でも法と文は）異なっており、文は英文学・仏文学志望者以外は、ドイツ語が第一外国語、英か仏が第二外国語だった。歴史の科目があるのは法文だけだった。新村出は歴史が好きな学課だった。

・明治二七（一九九四）年一月、上田萬年の講演「言語学者としての新井白石」を聞き、博言学科（明治三年から、言語学科）への進路を決める。

上田は、ヨーロッパ留学から帰ったばかりの気鋭の博言学科教授。講演は新井白石の言語学書『東雅（とうが）』の「序」が、言葉には歴史性・階層性・地域性があることを明らかにし、研究方法では、当て推量でなく文献に依拠すべきこと、他国からの影響に留意すること、音韻が重要であることを述べた、先駆的なものであると高く評価したものである。『東雅』の本論は、天象や物の名について語源等を詳細に記した大部のものであるが、上田の講演では具体的に触れられてない。

・明治二九（一八九六）年七月、第一高等学校卒業。過渡期のため在学四年だった。

東大文科博言学科時代

・明治二九（一八九六）年九月、帝国大学文科博言学科に入学。
・博言学科は明治一九（一八八六）年設立。最初の教官は英人チェンバレン、次いで独文学のフロレンツが担当、明治二七年から上田萬年・高楠順次郎が担任。

・博言学科のカリキュラム、週のコマ数（明治三一年）

* 第一年 博言学（2）、国語学（2）、ラテン語（3）、ギリシア語（2）、ドイツ語（3）、フランス語（3）、人類学（3）、哲学概論（4）

* 第二年 博言学（1）、声光学（1）、ローマンス語及びチュートニック語比較文法（2）、国語学（2）、支那語（3）、ラテン語（3）、ドイツ語（3）、梵語（2）

* 第三年 インド・ヨーロッパ語比較文法（2）、博言学演習（2）、支那語（3）、朝鮮語（3）、ラテン語（3）、梵語（2）、教育学（2）

・第一年次、上田教授の言語学、声光学、国語学史の講義を受ける。
・一年生の修了論文に「日本音韻研究史」の課題を与えられ、ほと

んど独力で、四〇〇字詰で一〇〇枚余の論文を提出（目次、レジメ末尾参照）。

・第二次、上田教授による、言語学の一般読講、言語起源論のドイツ書での講義。

・二年生の前期演習論文「国語の音韻について」、修了論文「上古文字論批判」提出。

・「日本音韻研究史」をはじめとする大学時代の三つの論文にたいして、新村出の高弟であった泉井久之助は、収められた『新村出全集』第一巻の「解説」で、「三篇にあらわれる博通と円熟には、さすが、すでに驚くべきものがある」と評している。

・明治三一（一八九八）年七月、卒業式に際して明治天皇より成績優秀者として銀時計を下賜される（文科大学では他に波多野精一、中山久四郎、辻善之助）。

東大卒業後、東京での事績

・卒業後、東大で大学院、助手、講師、助教授と進む。兼任で東京高等師範学校、東京外国語学校でも教鞭をとる。

・明治三三（一九〇〇）年二月に創刊された『言語学雑誌』の編集に携わる（明治三五年九月休刊）。

・全国各地に方言調査に赴き、明治三七（一九〇四）年一二月、『東西語法境界概要図』を完成。（この図は現在でも高い評価を得ており、新村出記念財団で複製を頒布している。）

・国語調査委員会補助委員を務める。

・『言語学雑誌』を中心に多くの論文を発表している。

同誌に三回にわたって連載した「ヤコブ・グリム」を当人は処女

論文としている。グリムを最初に日本に紹介したものと思われる明治三三年三月〜三四年八月『新村出全集』第一巻所収）。

「ヤコブ・グリム」は、ドイツの言語の歴史を文献的に、あるいは方言研究的に究めて、あるいは言語史、あるいは『ドイツ文典』などを編纂して言語学草創時代の三大偉人の一人であったんで、私の研究は、歴史的研究にせよ、現代語の研究にせよ、グリムの学風に従って徐々に自分の研究を進めて行きました。」（思い出を語る）『言語生活』一九五六年九月〜十二月）

やはり言語学者であった弟のウィルヘルムとともに『ドイツ語辞典』の編纂・執筆を始めた。グリム兄弟として童話の作者として著名。

・「日本人の眼に映じたる星」を著し、上古からの文献を渉獵し、星がどのように扱われ表現されてきたかを詳述している（同誌、明治三三年八月）。

・当時、経済学者、知識人として名声を得ていた田口卯吉にたいして「田口博士の言語に関する所論を読む」（同誌、明治三四年七月）、「田口博士に答へて言語学の立脚地を明にす」（『史学雑誌』明治三四年一月）で厳しく批判。

・『教育学術界』に「言語教授上声音学の価値」、「声音学大意」を連載（明治三四年〜三五年）。

・明治三八（一九〇五）年から三九年にかけて、東大で「国語学概説」を講ずる。

受講者のなかに、橋本進吉、小倉進平、伊波普猷、金田一京助がいた。

金田一京助の講義ノートにもとづいて、「名講義シリーズ」の一つとして、『新村出 国語学概説』が刊行されている（信光社、一九七四年）。同書の解説で金田一春彦は、父京助の、新村の講義

への絶讃ぶりを紹介している。

・明治三九（一九〇六）年、京都帝国大学文科大学に行かないかとの内示を受け、受諾。明治四〇年一月、京大助教授の辞令を受け、三月からヨーロッパ留学に発ち、独英仏で言語学を学び、資料を閲覧する。大英博物館では、天草版イソップ物語を全文筆写。

・明治四二（一九〇九）年四月帰朝、五月、京大教授となり、言語学講座を担当。明治四四年から昭和一一（一九二六）の定年まで、大学図書館長を兼任。

新村出の学風、為したこと

・言葉が人間と共に生き、使われてきたことを大切にする歴史主義で、理論化・体系化する方向性は稀薄。「こうあった、こうある」と述べ、「こうあるべき」と言うことは少ない。泉井久之助は、「史的言語学」と位置づける（『新村出全集』第一巻「解説」）。

・国語政策についても、上から大きな転換を指示することには反対し、少しずつ変えていくべきとする。一貫して、日本語は、かな漢字交じり文であるという立場。

・辞書編纂には向いていた学風と言える。大槻文彦の『言海』を修訂・増補した『大言海』四巻の編纂にかかわる。『辞苑』（博文館、一九三五年）を刊行、それを受け継いだ『広辞苑』（岩波書店、一九五五年初版）に結集。『広辞苑』刊行の翌年、文化勲章受章、京都市名誉市民に推挙される。

・海外との言語・文化の交流につよい関心をもっていた。ヨーロッパ留学を経て京大に赴任して以後、南蛮吉利支丹関係の書誌・文物についての著作を多くのこす。

・京大図書館長を足かけ二六年間（大学在任中のほとんど）務め、古今東西の文献に博通していた。博い知識をもち、裾野が広いほど山は高くなるとの考えをもっていた。

・若くして言語学・国語学の高い水準を体得し、それを後進に伝えることに意を注いだ。「現代国語学の産みの親」（金田一京助）とも言われ、その分野の研究の道を拓いた。

・昭和二三（一九三八）年、日本言語学会創立にあたり、初代会長に就任（本年一月一七・一八日の日本言語学会大会では、創立八〇周年を記念して、初代会長の新村出をテーマとしたシンポジウムが行われる）。その他、多くの学術・文化・教育関係の団体・組織の役員となり、その育成に尽力した。

・二四歳年下の寿岳文章（英文学者、和紙研究者、ダンテ『神曲』翻訳者）をはじめとして、多くの若い研究者とわけへだてなく付き合い、成長を支援した。

・論説や人物について、先入観のない「非常に広やかな態度」で接した（寿岳文章）。

・多くの高校の国語教科書・副読本・教師用資料の編著者になっている。

・『新村出全集』全一五巻（筑摩書房、一九七一〜七三年）がある。学術書はごく若いときのもので、ほとんどが随筆、啓蒙書である。

※日本音韻研究史 目次

第一期 予備時代

一 奈良朝より平安期に終に至

音博士／悉曇の伝来及び其の研究／五十音図の製作／古語の解釈

二 鎌倉時代

管絃音義の五十音説／韻鏡の伝来

三 南北朝より乱世に至る

第二期 蓄積時代

浄厳／悉曇三密鈔

契沖／和字正濫抄／橘成員の和字通例書／正濫要略

益軒の日本釈名／白石／東雅／東音譜／徂徠の南留別志／春台の和読要領／音義の伝統

第三期 発輝時代

文雄／暦光韻鏡／和字大観抄／馬淵の語意考／成章の北辺随筆／豊岡井字の正声伝（音義説の伝統）

宣長の字音仮字使ひ／漢字三音考／秋成の呵刈葭／靈語通／春台の五十音辨説／石塚龍磨の古言清 濁考／光枝の国辞解（音義説の伝統）

富森一斎の韻鏡藤氏伝／泰山蔚の音韻断／地名字音転用例

第四期 修正時代

太田方／漢吳音図／義門の男信／関政方／傭字例／声調篇／行智／悉曇字記真釈／梵漢対訳字類編

鈴木朗の雅語音声考／如是観の和訓考／篤胤の古史本辞経／野々口隆正の通略延約辨／音義説の流 行／守部の五十音小説

総評

（『新村出全集』第一巻、四五九―五六二頁所収）

※参考文献―新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか―新村出の生きた軌跡』（世界思想社、二〇一七年八月）

「広辞苑の父」 新村出博士の生涯

——佐原で学んだ少年時代から辞書編纂に携わるまで

平成三〇年度千葉県立東部図書館歴史講座

二〇一九年一月一二日 新村 恭

I 佐原で学んだ少年時代

新村出は、明治九（一八七六）年一〇月四日、関口の次男として現山口市道場門前に生まれる。母静子。

実父・関口隆吉

「地方官。江戸生まれ。幕臣で、徳川家とともに静岡に移り、茶畑の開墾を提唱。新政府に仕え、山口県令として萩の乱を鎮圧。元老院議員。新村出の実父（一八三六―一八八九）」（広辞苑第七版）

・関口家は三河の関口荘がルーツで今川系の武士。徳川家康の正室、築山殿は関口家の出。

・隆吉の父、関口隆船は現御前崎市の池宮神社、佐倉家の出。幕臣御家人、与力。

・隆吉は次男であったが、長男が夭逝したため父を襲う。江戸城の警備係。

・剣道場「練兵館」に通う。木戸孝允と同門。幕臣や藩士の交流の場であり、ここで藤田東湖に出会い、水戸学の影響を受ける。

・江戸城開城に際して、勝海舟の配下で徳川慶喜を護る「精鋭隊」の一員。

・徳川家の移封、静岡藩の成立にともなって関口隆吉は、現菊川市

月岡（御前崎市と隣接）に居を構える。

*それまで駿河・遠江にあった、沼津藩・相良藩・小島藩・掛川藩・浜松藩は安房、上総に移封され、木更津県から千葉県となる。なお、佐原の所在する香取郡および匝瑳郡・海上郡は明治八年五月まで霞ヶ浦方面とともに新治県だった。

・農書をはじめとして本をよく読んでいた関口は、徳川家臣団の生活のため、茶の栽培を提唱。「精鋭隊」は「新番組」となって開墾に従事。

・明治四（一八七一）年七月の廃藩置県以後、地方官となる。本籍を守る正妻・綾のほか各地で生活をとにする静子、二人の妻がいた。

・山形から山口に赴任して次男が生まれたので、山を重ねて「出」とつける。同じ年の二月、菊川月岡の綾のもとで長男、壮吉が誕生。

・出が生まれた同じ明治九年の一〇月下旬、萩の乱勃発、帝国軍と県の力で早期に鎮定、

首謀者の前原一誠ら処刑。処刑前、関口は前原らに酒を振る舞って別れる。

*萩出身の木戸孝允の関口隆吉宛書翰あり、木戸日記にも関口に関する記事がみえる。

・明治一三（一八八〇）年、数え年五歳の出を山口県師範学校附属小学校に入れる。

・明治一四年、元老院議員になり、東京の現墨田区向島に出の姉・妹とともに移住。同地は、水戸藩の下屋敷近く。

漢学者のつながり

・関口隆吉の漢学の師匠は、大橋。
・大橋訥庵の師匠は、幕府の学問所の指導的地位にあった佐藤（佐藤一斎著『言志四録』は晩年の新村出の愛読書）。

・大橋訥庵は、長沼流兵学者、清水の四男。東京深川に漢学塾をひらく。尊皇攘夷の激派で、水戸浪士とともに桜田門外の変を企図して逮捕された。関口も尊皇攘夷思想の影響を受けている。

・思誠塾は大橋訥庵の養嗣子大橋が引き継ぐ。塾頭は千葉県多古町出身の並木。関口隆吉は同門で、明治になって向島の思誠塾あとに住んだこともある。

・出の師匠となる栗本は、関口隆吉と同門で旧知、並木栗水の弟弟子で女婿。

・関口隆吉は、清水赤城の長男太郎の息子（大橋訥庵の甥）を長女の婿とし、関口隆正を名のらせる（出より二〇歳年上）。

・隆正を養子に迎える前、関口隆吉の、弟関口潜宛書翰（明治一四年八月八日）。

「〔清水璵四郎は〕当春以来下総国佐原と申す処に寓居し、近方の子弟を集め教育に従事致されおり候。」

当時の学制と教育の実情

・幕藩体制を受け継いだ明治政府の、国民国家形成のための大きな課題は、税制・兵制・学制の確立。

・廃藩置県のすぐ後、明治四（一八七二）年七月、文部省新設。明治五（一八七二）年八月、学制布告。欧米の教育理念の影響を受けたもので、学問の重視、立身目的にされていたとはいえ、「個人の

ため」が謳われていた。

・現状にそって具体的に進めるため、教育令がしばしば出され、制度は変転が激しい。復古主義の流れもある。年齢による規定はゆるい。

・初期は、民衆の理解がないなかで、学校の襲撃、焼き討ち事件が全国で発生した。

・明治九（一八七六）年の就学率

男Ⅱ五四・二％、女Ⅱ二一・〇％、平均Ⅱ三八・三％

・明治八年の小学校施設

寺院Ⅱ四〇％、民家Ⅱ三三％、新築校舎Ⅱ一八％

一学校一教員Ⅱ五九％、一学校二教員Ⅱ二二％

（山本正身『日本教育史』慶應義塾大学出版会、二〇一四年による）

・『佐原市史』には、幕末・明治期の私塾・寺子屋、計四三が表で紹介されている。

・同市史に『千葉県教育史』から転載された明治八年佐原地方の、認可された私立小学校の数は一五である。

螟蛉塾（は青虫の意。塾か？）

・螟蛉塾は並木栗水が開いたもの。並木家は多古町で醸造業を営んでいたが、栗水の父が佐原に出て医者として開業。栗水は医者を経ず、安政三（一八五六）年、思誠塾を離れて佐原の伊能七左衛門の長屋で開塾。

・慶応二（一八六六）年に郷里の多古町に戻って同名の塾を開く。（多古町の地では、「螟蛉塾跡」として史跡扱いにしている。）

・佐原では、栗水的女婿栗本義喬が塾を引き継ぎ今の中川岸に開塾、

のち諏訪神社麓の無人の常照寺に移る。

・「この螟蛉塾はなかなかの人材をだしている。学科は漢文読法・経学・和漢歴史学・文章学・詩学・習字などであった。」（以上、『佐原市史』による）

・しかし、新村出は回想で「蜻蛉塾」とし、「とんぼ頓筆」という随筆も書いている。

「昔々私がティンエイジャーの初めに学んだ漢学塾が千葉県佐原の蜻蛉塾といった様な因縁で、お里が現れて来た迄で。」（昭和二八年）

・あるいは、並木栗水が多古町へ戻って名称を引き継いだのが螟蛉塾で、佐原で栗本義喬が後を受けて開いたのが蜻蛉塾といったのか？ 未解決、今後の課題である。

関口出の塾での生活

・一次資料に乏しいので、新村出の回想に依拠せざるを得ない。しかし、ほとんどが、最晩年のものでなつかしく美化されている面がある。唯一戦前のものが以下。

「…私は下総の佐原という田舎町、刀根川のほとり、香取神宮の森をもみはるかす青丘のふもと、その寺子屋の漢学塾にぶちこまれた。関口の実兄は、義兄の後をたどって、上海に留学し、西洋人の学校に入れられて、これは又新しい教育を受けるようになった。…」（『上海雜記』昭和二年）

・親元離れて、常照寺に起居しての学習。明治一七（一八八四）年春から二〇年二月まで、数えて九歳から一二歳。小学校は卒業していない。

・東京・佐原間の行き来。成田鉄道が佐原に開通したのは明治三一

（二八九八）年。当時は船が中心、蒸気船が利根川から江戸川へと運航していた。乗合い馬車、人力車もあった。一年に一度東京の父のもとに帰るときを含めて、同行者は関口家の老齡家人、中村知常。講師は栗本義喬で弟子たちと同居。ちよんまげのまま。のちに一高で漢文の教授もつとめている。栗本の晩年、栃木で教えをうけた者の回想によると、酒気を帯びていたが、教えは大変厳しかったという。

・塾頭は菊池晋二、次席・益田祐之、他に内野五郎三、加藤良等、出より年長の人々がほとんどだった。

・テキストは四書五経、『小学』『日本外史』『皇朝史略』。素説が中心。東海散士『佳人之奇遇』を私的に輪読。

・剣術、柔術もあり。霞ヶ浦へ遠足（遠舟）。祭礼のときなど香取神宮へ行く。『唐詩選』の詩ガルタ。

・食べ物「ダイコン、ゴボウ、ニンジン、イモ、トウフやコンニャク、稀にはイワシとシヤケ、それ以上の食物は全くつかなかった」。香取神社で「スルメのをたべたが、その香その味のうまかったこと」。

・「何かの厳罰か懲らしめか、懲罰やら仕置きを一度受けたことも忘れがたい。便所掃除、ふろ水のくみ込み、石階二十段もあったほどの中腹の釣瓶井戸の水を桶にくみ上げて、塾友の少年と二人で浴場まではこびあげる動作、これらの所業に、どうやら忍耐した意気地なさ…」『墓地の焼場の火も、泣き叫びながら目撃して畏ろしかった印象が存する。』（昭和三七年八月、八六歳時の回想）

・佐原時代を回想する歌。

いとけなき童べのむかしおもほえて佐原香取はなつかしきかな
諏訪の岡のふもとの寺子屋にただ漢籍の物学びせし（常照）

寺碑文)

春の夜の狐のよめいり田のくろの提灯ならば行列も見し (稲荷神社歌碑)

寺庭の古き榎の木にをうつ狸もきぬ

鬱蒼と神さび古き杉森の奥かしづもる香取大宮

・生涯唯一の田園的環境での生活。漢文の素養を含めて、新村出の根をつくった。

II 新村出の軌跡

静岡中学で学ぶ、父の死で新村家へ養子に

・明治一九(一八八六)年、中学校令がだされ、尋常中学校と高等中学校が設立される。

・明治二〇年、静岡県知事になっていた父関口隆吉のもと、静岡県尋常中学校に入学。

・一転、英語中心の教育を受ける。

・明治二二(一八八九)年五月、父が東海道線の列車事故のけががもとで死去。同年一二月、最後の將軍徳川慶喜の側近、新村猛雄の養子となる。

・同時に、慶喜の二人の側室(それぞれ一人ずつ子どもを産んでいる)のうちの一人、やはり新村猛雄の養子であった新村信と、戸籍上は兄弟となる。

・徳川慶喜邸の隣に住み、講義を陪聴したり、慶喜の子どもたちと遊んだりする。

一高から東大へ

・明治二五(一八九二)年三月、静岡中学卒業、上京して半年間、漢学者塩谷青山のもとで学ぶ。同年九月、第一高等中学校入学(同二七年から第一高等学校)。寮に入る。

・初めての国文学の講義を落合直文から受ける。文学青年となり多くの書物を読む。ドイツ語をよく学ぶ。

・明治二七年十一月、大学入学後指導教官となる上田萬年教授の講演「言語学者としての新井白石」を聴き、博言学科への進学を決意する。

・明治二九(一八九六)年、一高卒業、帝国大学文科大学博言学科入学。

・ラテン語、ギリシア語、フランス語など多くの言語と言語理論を学ぶ。

・一年次の修了論文「日本音韻史研究」四〇〇字詰一〇〇枚余を提出。二年以後特待生。

・明治三一年七月、東大卒業、成績優秀者として明治天皇から銀時計を下賜される。大学院に進学。

東大での研究活動、結婚

・助手、講師、助教授と進み、東京高等師範学校、東京外国語学校でも教鞭をとる。

・全国に方言調査に赴き、明治三七(一九〇四)年『東西語法境界概要図』を完成。

・処女論文は、ドイツの言語学者を紹介した「ヤコブ・グリム」。「日本人の眼に映じたる星」では、上古からの文献を渉猟して、星・星

座を詳述（いずれも『言語学雑誌』に発表。すでにグリムと同様の、歴史主義的学風が表れている。語源語誌を大切にし、言語学・国語学を理論的・体系的にまとめる方向にむかわず。

・明治三八年から一年間、東大で「国語学概説」を講義。金田一京助、橋本進吉、小倉進平、伊波普猷らが受講。

・明治三二（一八九九）年、海軍兵学校教授荒川重平の長女豊子と結婚、四児をもうける。

京大へ転任、終生京都に住む

・明治四〇（一九〇七）年一月、京大助教授の辞令を受け、三月から欧州留学に発つ。

・インド洋、スエズ運河を通って欧州着。ドイツ中心に研修。明治四一年九月からオランダを通ってイギリスへ。大英博物館で天草版伊曾保物語を筆写。四二年一月にフランスへ。

・明治四二年三月末、ベルリンに戻ってシベリア鉄道に乗り、ウラジオストックから明治四二年四月、敦賀へ帰着。五月、京大教授になる。九月から言語学の講座を担当。

・明治四四（一九一〇）年から、大学図書館長を兼任で、定年まで二六年間務める。

・京大時代は、南蛮吉利支丹関係の文物についての小論を多く書き、『南蛮更紗』などとして出版。また、多くの高校国語教科書・副読本の編者となっている。

・京都の住まいは、最初は御所東の新烏丸通下ノ切通、ついで鴨川西岸土手町の木戸邸に移り、大正一二（一九二三）年に木戸家から母屋を貰い受け、北区小山中溝町に移築して終生棲む。

『広辞苑』の前身『辞苑』の刊行、生みの親は出版人

・昭和五（一九三〇）年十一月、代表的著作の一つ『東亜語源志』を岡書院より刊行。同十二月、同社の岡茂雄から一般家庭向けの国語辞典を刊行したいとの要請を受ける。

・「そのようなものには興味をもたない」と即座に断ったが、自著を複数刊行してもらった岡の執拗な食い下がりにより折れ、条件付きで許諾した。

・条件は、元舞鶴女子高の国語の教員で教頭も務めたが退職しているが協力してくれるならというものだった。新村は、多くの高校国語の教科書、教材の編者を務めており、その関係で溝江のことをよく知っていたと思われる。溝江の百科項目も含めるという提案を受け入れて、一般向け国語辞書の編纂がスタート。

・先行する『大日本国語辞典』（富山房）等も参考にしながら、項目カードが作成され、その多さに、岡は自社の資金力では出版は難しいと考え、引き受けてくれる社を探す。渋沢敬三の仲介で、戦前の大手出版社、東京の博文館から刊行することに決定、岡は新村とともに著作権を折半し保有することになる。

・新村の指示、岡のマネージメント、そして溝江のもとに東京高師出身のスタッフを集め、『辞苑』は昭和一〇（一九三五）年二月に刊行、好評で刷りを重ねた。

『広辞苑』岩波から刊行

・『辞苑』刊行の数年後、改訂作業が始まる。同時期、次男の猛が治安維持法違反のかどで逮捕・勾留されて失職し、執行猶予で保釈

され(昭和一四年)、父新村出のもとにいて、改訂を手伝うことになった。

・次男猛は専門がフランス文学であり、外来語の担当から校訂全般に参画していく。孫引きや不備の多い初版の全面的改訂に乗り出した。

・改訂版刊行が遅れるとともに戦局が深化、ついには空襲で博文館・共同印刷は全焼、改訂作業中の校正刷がわずかに残る。それを猛が京都に持ち帰って終戦を迎える。

・GHQの支配下、大きな企業体であり、南方植民地への投資もしていた博文館は、追及をのがれるため、企業を解体、小さな出版社だけが残るかたちにした。

・そのため博文館では、『辞苑』の改訂版がだせなくなり、それを岩波書店に引き受けてもらうことになった。

・昭和二三(一九四八)年九月、岩波書店のなかに新村出辞書編纂室がおかれ、のちに東洋大教授となる市村宏をチーフに、一〇名のスタッフが集められ、原稿作成が始められた。

岩波との折衝役は猛が務めた。人件費などの編纂費用は、新村家が印税前借りで負担した。

・国語項目は『辞苑』の内容をかなり引き継ぐかたちだったが、社会状況が一変した中での外来語や百科項目の立項と釈文作成は大きな事業だった。新村出・猛父子の人脈と岩波書店の力で、各分野に一流の研究者が揃えられた。

・編者側から順次原稿が入り、昭和二八年二月から校正刷がではじめ、岩波の大きな力の傾注もあって、『広辞苑』は昭和三〇(一九五五)年五月二五日、刊行された。

・昭和三一年一月三日、新村出は文化勲章受章、京都市の名誉市民に推挙される。

・改訂第二版刊行の途次、昭和四二(一九六七)年八月一七日、新村出永眠。

付 新村出と親交があつた千葉県の三歌人

・新村出は歌を詠むのが生活の一部で膨大な和歌をのこしている。歌集は生前に三冊、歿後遺族により一冊刊行されている。

・特定の短歌結社に加わらなかつたが、多くの歌人と親交があり、そのなかで最も親しかつたのが佐佐木信綱、『心の花』主人であつた。

・寄贈された三氏の歌集には書き込みが多く、佐原での思い出が記されている。

吉植庄亮(一八八四～一九五八年)

・戦前は衆議院議員で政治家でもあつた。印旛沼開拓の中心人物。若くして歌人となり、『』を創刊。代表的歌集『開墾』。千葉県を代表する歌人。

・新村出は『橄欖』の特輯号に「歌集『開墾』を読みて」を寄せている(昭和一六年九月)。「開墾」の扉に「きよう一日一夜読みつづけつ。吹雪はげしく、夜更けては寒さ身にしむこと此の冬初めてのことなり。感興限りなし。時に一月二十日午後十一時なり」と墨書。

椿一郎

・香取郡（旧米沢村）の農業家。佐佐木信綱の竹柏園の門人。代表的歌集『農人の歌』。

・新村出とは親しく手紙のやりとりをしていた。新村出も随筆でしばしば椿の歌を紹介。

「その落葉松を掻きあつめる情景は、下総の椿さんの新歌集である『農人の歌』と題した本に数首出ているのを見出して、これもむしうに嬉しかった。その地方の方言で松の落葉をサラキというそうである。」新村の書き込みには用語のリストもあり圧倒される。

飯田恒治

・成田機関区の鉄道機関士。はじめ椿一郎に学び、のち佐佐木信綱に私淑すること大。歌集『機関士の歌』

・新村出は佐佐木信綱に感想を送り、『心の花』に「健全質実な作品」として紹介された。

『機関士の歌』の純真さ自然さには、いたく感心してしまい……乗務の歌の数十首が中心をなしそれに菜の花のゆれを詠じた私の好きな一瞬間のこよなき余裕をたたえた佳吟等、みな生き生きした、はつらつたる詠歌が少くなく……」

言語学者新村出の学風と広辞苑

(二〇一九年七月一三日、関西言語学会、新村恭)

*新村出・一八七六(明治九)年一〇月四日生まれ。

父は地方官の関口隆吉、母静子。

I 新村出の言語習得歴

・小学校高学年年代——ひたすら漢文の素読、四書五経など(千葉県佐原の塾に親元離れて三年間)

・静岡県尋常中学校——一転、英語中心の教育。日本語の教科書が普及するに至らず、語学以外の学課の教科書も英語のものがあつた。(五年間)

・一高時代——ドイツ語が第一外国語だった。文学にめざめ、スポーツ等の趣味はもたず、多くの書物を読む。生涯ゲーテファン。句集もよく読む。(四年間)

・帝国大学文科大学博言学科のカリキュラム、週のコマ数(明治三十一年)

*第一年 博言学(2)、国語学(2)、ラテン語(3)、ギリシア語(2)、ドイツ語(3)、フランス語(3)、人類学(3)、哲学概論(4)

*第二年 博言学(1)、声学(1)、ローマンス語及びチュートニック語比較文法(2)、国語学(2)、支那語(3)、ラテン語(3)、ドイツ語(3)、梵語(2)

*第三年 インド・ヨーロッパ語比較文法(2)、博言学演習(2)、支那語(3)、朝鮮語(3)、ラテン語(3)、梵語(2)、教育学(2)

II 歴史主義の学風

・新井白石の『東雅』の影響

一高時代に聴いた、上田萬年師の講演「言語学者としての新井白石」が「はからずも私の運命を永久に決定してしまった」。

上田の講演は、『東雅』の「総論」の紹介であつた。白石の言語観、方法について述べられた部分である『史学雑誌』一九九五年二・三月号に講演録。『東雅』の大部な本論は天象、器物・道具、動植物など物の名について語源等を詳細に記した全二〇巻である。

「出の後年の研究者としての軌跡をみると、南蛮吉利支丹の日本語への影響や文化研究、物の名を中心とした語源語誌研究に力を注いだことなど、その学風をふくめて、新井白石と重なってくる。」(拙著)

・ヤコブ・グリム

新村出自ら「処女論文」という「ヤコブ・グリム」(『言語学雑誌』一九〇〇年三月・一年八月)を二〇代半ばで書いている。

「……この偉人が歴史的観察に深かったといふことである。即ち彼は人心自然の史的発展の跡を尋ね、その間に私心を挟まなかったのである。彼の知ろうとしたのは實在であつて、理想ではない。在りのまゝが彼の愛する所で、矯飾はその嫌ふ所であつた。この事は言語研究について最も著しく現はれてゐるので、……換言すると、言語の当然的規則を立てて、之に服従を要めるのではないのである。そんな抽象的な法則を設けて、言文を拘束することはグリムの極嫌ひな所であつて、言語の真実な有様を調べあげさへすればそれで満足したのである。……」

「私の言語研究は、歴史的研究にせよ、現代語の研究にせよ、グリムの学風に從つて徐々に自分の研究を進めて行きました。」(思い出

を語る」『言語生活』一九五六年九月）

・泉井久之助の解説『新村出全集第一巻』

「先生の言語的研究における態度は歴史主義的である。後年には、みずからもいつておられたように、むしろますます歴史趣味的であった。……」

「ただ、歴史をもつて、一切の人間営為と、営為のあとの説明原理とするとき、その努力は歴史的存在であるより、むしろイデオロギー的に歴史主義的となる。」

これが、新村先生も常に推賞しておられたドイツのヘルマン・パウルの信念であり態度であった。：パウルの『言語史原理』はこの信念の結晶である。……」

「……いわゆる近代言語学が言語事実間の〈関係〉の上に言語の体系性の設定を求め、対象とする言語事実の研究における徹底した網羅性の上に論理的な操作を施し、そこに働く規則性を時には確率・統計的にさえ究明してゆく煩いは、年齢の進みとともに、先生のいとわれたところでもあったと思われる。」

：近代言語学も徹底してその成立を全うするためには右のような論理的な努力と、個別的な言語事実の史的究明の積み上げによる史的言語学との、総合の上に立つべきものであろう。これに対して、先生の言語と国語に関する驚くべき博搜と犀利な整理による史的言語学は、将来においてもながく、大きい支柱であるにちがいない。

何よりも各時代の日本語に対して先生ほど、語感の鋭敏で正確であった人は少ないであろうと思われる。その使用される日本語もまた常に正しく美しかった。先生の言語・国語の研究が、ユニークな光を放ちつつ学界を領導し、世に対する貢献が著しかったのは、こ

の理解と実践における先生の精妙さのゆえであった。先生の書かれたものには常に日本的な伝統のかぐわしい匂いがあつた。」

*京大在職中のほとんど、足かけ二十六年間、京大図書館長を務めた。多くの高校国語の教科書や副読本の編・著者でもあつた。

Ⅲ 広辞苑への眼差し

新村出辞書編纂室主任・市村宏への書簡をもとに

*同編纂室は、一九四八年九月スタート。新村家で雇用する一〇名のスタッフを擁した。市村は富山房で辞書づくりの経験を持ち、広辞苑刊行後、東洋大学教授、国文学者。

以下、広辞苑第七版のいくつかの項目を、新村出の語源考察とともに見る。

がん・ばる【眼張る】『自四』目をつける。見張る。浄瑠璃、神霊矢口渡「さつきに跡の松原で――つて置いた金の蔓」

がん・ばる【頑張る】『自五』（「頑張る」は当て字。我二張ルの転）①我意を張り通す。「まちがいないと――る」②どこまでも忍耐して努力する。「成功するまで――る」③ある場所を占めて動かかない。「入口で――る」

・新村出「頑張考」（一九四四年、全集第四巻所収）参照。日本国語大辞典は、我二張ル説をとらず。大辞林は両辞書の説併記。

・市村宛（昭和二十四年十月十四日）付。

カカシ（清濁両用（東方二ハカカシ、西方二ハカガシ）標準音は

未定。歴史的には濁音を正トス。

「焼キ嗅ガセ」の略転といふ説、尚検討ヲ要スレドモ、柳田氏等の民俗学者にツキテモ、タシカメタキモノナリ。……

かかし【案山子・鹿驚】（カガシとも。「嗅がし」の意か）①獣肉などを焼いて串に貫き、田畑に刺し、その臭をかかせて鳥獣を退散させたもの。焼串（やいぐし）。焼釣（やいづり）。②竹や藁（わら）などで人の形を造り、田畑に立てて、鳥獣が寄るのをおどし防ぐもの。とりおどし。〈季語秋〉。日葡辞書「カガシ」③みかけばかりもつともらしくて役に立たない人。みかけだおし。

・市村宛〔昭和二十四年十月二十七日・三十日〕付。

はらん、葉蘭を標準名とすれども、語史的にいへば「オオバラン」（大葉蘭）の上略とみる考と、漢語の「馬蘭」の内容転訛によるとする考と、両者あり。文献的には、後説を史的眞実ありと信ずべし。国語辞書及植物学辞典には現代の標準名をハラン（清音にて）となせども、語源的、語史的には正解に非ず。

ばらん【葉蘭】①↓はらん。②（ハランとも。①の葉を使うことから）握り鮎などをのせて供する緑色の葉。また、鮎や弁当の副食を盛り合わせるとき、仕切りや飾りに使う、葉を切ったもの。庖丁で切り絵のように細工したものもある。

はらん【葉蘭】（バランとも）クサスギカズラ科（旧ユリ科）の常緑多年草。下略

・市村宛〔昭和二十五年七月二十日〕付。

「シラを切る」のシラは、「シラばくれる（シラヌフリヲスル）」のシラと同じく、やはり語幹は「知」シラなるべくやと存候へども、

白（シラ）は白紙にもどす、白紙状態、坐が白ケルなどのシラの如く、無（東洋的無）と通ずるわけ、無色なれば右の句も白とのとの連想なしとはいふべからず。拙考にては他方シル（知）シルスは、右と逆に、明白の意もあり、（著イチジルシ）（顕著、著明）（印欧語原論にシル、シロを同根とする説もあり）白を切る 知っているのに知らないふりをする。しらばくれる。しらばくれる《自下一》知っていながら知らないふりをする。白（しら）を切る。しらばつくれる。しらつぱくれる。『どこまでもーれて通ず』

・市村宛〔昭和二十九年五月六日〕付。

……フキノトウ、いま「露の臺」と字を充るも、もとは「露」の塔（フキノタウ）（塔はStupa→metathesisによりしか、未考）これは元禄時代の文献、たとへば俳書（毛吹草、岩波文庫本二一五）にも「露の塔をくむ番匠や春の雨」とあり、文字も構造も明白とす。慶長の長崎キリシタン版の日葡辞書に「タウ（トウにあらず）が立つ、チサの新芽、キリ（桐の花）などの芽もえたつさまにいふを説明す。臺（トウの音なし）の字を充てしはベダンチックのみ。右念のため申上置候。

ふきの・とう【露の臺】：タウ（「露の塔」からか）春の初めに露の根茎から生え出る花茎。ふきのじい。ふきのしゅうとめ。〈季語春〉。文明本節用集「款冬、フキノタウ」

・市村宛〔昭和二十九年八月十六日〕付

『新辞苑』『最終的に『広辞苑』となった』二八「ペケ」といふ從來のものはや廃語ともなりし外来語の存否如何は不知候へども、マレイ

語 *peru* 説（大槻『言海』に拠り、『大言海』第四冊〈昭和十年刊、小生補修〉にも、新村の名をも附して、この説を主張もなしあるも、（荒川の『外来語辞典』昭和十六年三省堂、及旧本大正四年刊三省堂、上田、高楠、白鳥、村上、金沢共編の『日本外来語——』）いずれも、『旧言海』（けだし、大槻翁の『学藝志林』によれるか）に従ひをれども、小生としては、今やむしろ「不可」（*pro*）の参考的別説を支持したく存じをる次第に候間「八行」のあとの方にて、なほしの余裕綽々たるべければ何卒よろしく御修訂を煩はし度候。「古くからマレー語原説なるが、むしろ「不可」（*pro*）の支那俗語源の方を妥当とする」旨を簡説ありたし。

ペケ（中国語の不可（*bu ke*）からとも、また、もとマレー語の *pergi* で「あっちへ行け」の意とも）①だめ、いけない、氣に入らぬ、の意。歌舞伎、八幡祭小望月脈（はちまんまつりよみやのにぎわい）「少し—さね」。「—にする」②罰点の「×」のしるし。「—がつく」

・市村宛（昭和三十年五月九日）付、広辞苑刊行間近にあたり感謝の手紙。末尾に和歌を三首そえる。

広辞苑きみが十年のいそしみは草木花咲く春を迎へぬ

つちかひつたがへしつて辞の葉の広き苑生に花さく五月
育て来しひろきそのふの草に木に憂の花もまじりさくらむ